

書評と紹介

柳原 恵著

『〈化外〉のフェミニズム

——岩手・麗ら舎読書会の
〈おなご〉たち』



評者：海妻 径子

本書の概要

本書は、「リブを含めたフェミニズム運動を、デモなどに代表される狭義の政治運動ではなく、女である私としての「生き方」を日々問い直していくような、「生き方」そのものを運動とするものとして捉え」ようとする著者が、自らの出身地でもある岩手で展開された自生的なフェミニズムがどのようなものであったのかを、その担い手であった小原麗子（1935～）と石川純子（1942～2008）という二人の女性、および小原主宰の麗ら舎読書会の女性会員たちへのインタビューや、彼女たちの著作物等の分析で明らかにしようとするものである。

小原と石川は、それぞれ東北で盛んであったサークル・生活記録運動や青年団活動、詩運動などに加わるかたちで活動を始める。しかし「名誉男性」的に席を与えられるこれらの活動だけにとどまることなく、1971年に出会って以降「女であることの生きがたさ」を女同士で語り合える場をつくろうと意気投合し、「おりづるらん読書会」「おなご舎」、そして麗ら舎へと、女性たちのネットワークを作り発展させていく。

小原は和賀郡（現・北上市）の農家に生まれ、詩作に熱中し農村女子青年のリーダーと目されながらも、19歳のときに「自活を夢見て」千葉県に女中奉公に出る。一年ほどで帰郷して後も縁談を断り、農協金融課の職員となって花巻市街地にアパートを借りて独立、49歳で早期退職した際に退職金で北上市の新興住宅地に一戸建てを購入して、麗ら舎の活動拠点とした。

それに対して石川は、生後1年ほどで海軍の職業軍人であった父の実家があった宮城県登米郡（現・登米市）に疎開し、戦争未亡人となった母が教育熱心であったこともあり、1961年に東北大学教育学部に進学。セツルメント活動に加わるも「自己批判だとか相互批判だとかが大好きな集団の中において、まだ君は近代人に至っていないというようなことを言われ」「自分の言葉さえも失ってしまった」経験をする。卒業後に岩手県水沢市の私立高校の国語教師となり、美術教師であった夫と結婚・出産後も共働きを続け、「教師として男性に伍して働く「個我」としての「私」と、赤子に向き合う「おなごの世界」に生きる……「〈わたし〉」が引き裂かれているという感覚」と向き合いつつ、詩作さらには東北の農婦の経験の聞き書きへと活動を展開していく。

二人の出会いは、男子生徒の「長髪問題」に対し小原が批判的コメントをしたことを詩作のネットワークで伝え聞いた石川が、小原に面会を求めて電話をかけたことに始まるという。以後徐々に仲間を増やし、麗ら舎となって以降だけでも30年以上も活動を継続し、女性学や女性史、郷土史、詩歌などを取り上げる読書会、「おなご正月」や登山などのイベント、そして和賀町出身の戦没農民兵士・高橋千三とその

母セキを弔うことを通じ現代日本社会の軍事化傾向を批判する「千三忌」開催、などの活動を展開していく。麗ら舎の会員となって足掛け8年参与観察した著者によって、地方農村およびその近郊市街地の女性たちの活動の具体的内容、そして彼女たちがその活動に込めている意味や内的論理が、きわめて詳細に紹介され検討されている。

本書の意義

本書でも述べられているように、これまで1970年代のフェミニズム運動史は、しばしば田中美津(1943～)が中心メンバーとなった東京の「ぐるーぷ・闘うおんな」とリブ新宿センターを中心として「東京中心主義的」に記述されてきた。地方における女性たちの運動は、その存在を指摘されつつも、具体的な研究の進展ははかばかしくない。その点で本書の成果は先駆的であると同時に大変貴重なものである。とりわけ、岩手において戦前からの生活記録運動や北方教育運動、青年団活動等が、戦後にもかたちを変えつつ受け継がれ、フェミニズムへ接続していく過程が生き生きと描き出され、興味深い。生活改善運動や家族計画・母子保健普及運動に焦点があてられがちであった、東北農村およびその近郊市街地における女性運動史に、新たな一頁を付け加えるものである。

雇用労働における男女不均等な待遇の是正を訴える女性労働運動や、わが子の生命健康を守ろうとすることから出発し、“いのち”一般や自然環境の保護へと向かっていく専業主婦の消費者・エコロジー運動、政界に女性を送りこもうとする代理人運動などと比べ、小原らの運動は明確な到達目標があるわけではなく、またリブ合宿や中ピ連のピケのような視覚的に訴求する反逆性に富むわけでもない。だがそれゆえに40年以上にわたる彼女たちの活動の継続性

と、“女が出歩く”“女が発言する・書く”“女が家を建てる”ことに対する、地域社会の厳しいまなざしの変わらなさ、そしてそれに対する彼女たちの地道な抵抗のありようには、瞠目させられる。かつそれを「地方の後進性」としてとらえるのではなく、“戦後民主主義”や学生運動における女性の言葉の篡奪と抑圧が、いかに地方農村やその近郊においても巧妙に展開され、その後も家族農業における女性の重労働およびケア・家事との多重負担が覆い隠され続けることをもたらしたかという、戦後における家父長制の再編の一形態としてとらえられている点は重要である。「麗子さんみたいに、農村の女子青年のリーダーをやってきた人が、……お袋の辛さをね、自分が経験しないで何が女性の地位向上だって……だけでも私にとっては家のなかが問題」(p.76)、「——君にとって一体女とは何なのかね……わたしにとって女とは、まずは二十七歳から二人の乳呑み子と舅をかかえて悪戦苦斗していた戦争未亡人である母のかなしみであり……わたしはそれを語ろうとうろろし、はてはことばにならぬ前に涙ぐんだりした。しかし問うた者は〈ことば〉を要求する……抽象界で整理された〈ことば〉を。……——いや僕の聞きたかったのは……問題は二つの階級のどの立場に立つかってことだと思うんだがね」(p.89)などという小原や石川の言葉によって読者は、家父長制に疑問をもった女性が、それを言葉にしようともがく片端から、重要なのは農業問題や階級であり家父長制に拘泥するのは虚偽意識だと、男性たちに言いくるめられたのは、都会でだけではなかったのだと実感するであろう。

また麗ら舎読書会のメンバーが、いわゆる「慰安婦」問題に対して早い段階から反応を示しており、しかもそれが戦前の東北農村で多発していた「娘の身売り」や、戦中の「粟まき」問

題(舅による嫁への性行為強要)との、性暴力問題としての共通性の認識から出発している、という点も(語弊がある表現かもしれないが)興味深い。いわゆる「慰安婦」問題に対する日本における女性運動の取り組みについても、従来の研究では松井やよりらキーセン観光反対運動からの展開にもっぱら光があてられがちであり、戦後日本の帝国主義的経済進出の下支えをさせられた主婦を含む都市部女性が、「聖母／娼婦」分断の乗り越えを図る中で「慰安婦」問題とぶつかる、という構図で語られやすかったのではなかろうか。本書で語られる、それとは異なる回路での地方女性たちの「慰安婦」問題との“出会い”は、他の地域ではさらに異なる“出会い”方があり得ることを示唆するものであり、今後日本で「慰安婦」問題に取り組む女性たちが、より地理的に幅広くつながろうと試みる上でも、非常に参考になると思われる。

「化外」概念の可能性と課題

他方で、本書のタイトルにもなっている「〈化外〉のフェミニズム」概念については、さらなる検討や整理が必要と思える部分も残されている。

化外とは「天子の徳によって人々を従わせること、また、君主の政治がゆきわたることを意味する王化の及ばない所、国家統治の及ばない所を意味し」、民衆史や詩運動の中で「東北を「支配者の目で見、支配者のことばで表現」しようとする……「征服史観」を東北自身が克服し、新しい歴史記述を生み出すため」に(p.28)、「負性を帯びた他称……を意味転換してポジティブな自称とし、対抗言説の場として再構築する」(p.29)言葉であったという。2007年に実施した石川へのインタビューを通じてこの言葉を知った著者は、「国内分業体制における東北の位置づけは……国内植民地という概念を用

いて説明されてきた。この国内植民地と化外という概念を比較したとき、前者は“中央”の経済的・軍事的侵略によって政治的・経済的に従属させられた「化内」の一領域であるのに対し、後者はその権力構造の外側にあるという違いがある。化外は……権力構造に取り込まれない可能性を有している」(pp.30-31)と述べる。そして「文化の果てる地」、「辺境」、「後進地」というイメージを付与され、つねに「他者」として語られてきた東北・岩手において、そこに暮らす女性たちはいかに生きてきたのか。……マイナスでしかなかった〈化外〉性を転倒して力の源泉とするような……〈化外〉というスタンドポイントから日本近代を批判的に眺める〈おなご〉たちの思想実践、いうなれば〈化外〉のフェミニズム……においては、都市中産階級フェミニズム……とは異なった、独自の主張が見いだせるのではないだろうか」(p.31)と主張する。

この概念が非常に魅力的なものであり、また既述してきたように従来の「東京中心主義的」女性運動史では語られてこなかった、女性運動のありようや他運動との結びつき方などの興味深い史実が示されているだけに、「〈化外〉のフェミニズム」が他の周辺性を帯びた地域におけるフェミニズムとどのように異なるのかについて、あまり掘り下げられていない点が評者には気になってしまった。本書では「〈化外〉のフェミニズム」と「おきなわ女性学」の視座の共通性が指摘され、また小原・石川らが森崎和江の著書に多大な影響を受け、『闘いとエロス』を読書会で講読し、さらには河野信子や石牟礼道子ら九州のフェミニストたちとの交流をもったことが指摘されているが、それゆえに評者には、「〈化外〉のフェミニズム」は“周辺(から)のフェミニズム”一般に還元可能なのか、還元し得ない東北や岩手独自の〈化外〉性があると

すればそれは何なのか、気になるのだが十分な明示はされていない。著者は「中央／周辺の二項対立史観」(p.280)を度々批判し、また「〈化外〉のフェミニズムの成立と展開過程は、決して地域のなかに閉じているものではなく、また〈中央〉と対立分断するような立ち位置を築くものではない」(p.281)とも述べているのだが、他の“周辺(から)のフェミニズム”との差異が明らかではないために、結果的に東京周辺におけるフェミニズムとの差異ばかりが目立ち、図らずも「中央／周辺の二項対立」的な読後感にいきなわれてしまうのである。

もちろんこれは、そもそも他の“周辺(から)のフェミニズム”史の蓄積が十分でないために生じる、比較作業の困難さに由来するものであり、本書にそれを求めること自体が無理難題と言うべきであろう。それを承知で評者の考えを述べさせてもらえば、ひとくちに“都市への労働力の供給地としての農村”と言っても、西日本の農村のあり方と東日本とりわけ東北のあり方には、様々な違いがあるように思われる。たとえば“人口流出を堰き止めるダム”となる小都市が数多く点在する西日本に対し、東北は東京への一極的な人口流出が顕著であり、いきおい農村女性の農外就労は“農村に残る／農村を棄てる”の二項対立で語られがちである。東北における、既存の農村秩序やそれを率いる男性たちに対する恭順要求の強さ、農村女性たちが自らの空間や経済力を持つことの困難さは、このような“農村に残る／農村を棄てる”の二項対立性の強さとして理解することはあながち的外れではないであろうし、本書が取り上げた「〈化外〉のフェミニズム」が北上市とその周辺で展開したことは、この地が工業団地を有し東北では数少ない“人口流出を堰き止めるダム”のひとつとして機能してきたことと、無関係とは言えないのではあるまいか。いずれにせよ、

“周辺(から)のフェミニズム”一般に還元され得ない「〈化外〉のフェミニズム」の独自性についての、今後の著者の分析を心から楽しみに待ちたいと思う。

内発か漂泊か——地域女性運動の担い手表象をめぐって

同様に、「岩手において、〈化外〉性を背景として「内発」した〈おなご〉たちのフェミニズム」(p.280)と著者が語る際の、「内発」概念に対する今後の掘り下げも、評者は心より期待している。両親の出身地である宮城県郡部で育ったものの、出生後まもなくの間は軍人であった父の駐屯地・神奈川県に居た石川は、仙台市にある東北大学へと進学し、その後岩手県水沢市の高等学校教員となっている。また麗ら舎メンバーには、満州から岩手県江刺(現・奥州市)への引き揚げ者であり、のち医療従事者としてシリア等への支援活動への従事経験をもつことになる小崎順子や、北海道大学卒業後にポーランド語翻訳者となり、大学教員だった夫の退職後に、彼の郷里である岩手県の中でも「ポーランド的な地形だった」(p.210)金ヶ崎を選んで移住した田村和子などもいる。「地域にとどまる」(p.280)という言葉から連想しがちな、自らの出生地で活動するというのとは異なる、多様な出身・居住歴の女性たちによって形成されているのが「〈化外〉のフェミニズム」であり、著者自身も「岩手内外、さらには国外の女性たちとの交流」の中で「土着性を捨てず、同時に土着性を超えるように〈化外〉のフェミニズムは発展している」(p.281)と強調している。

だが他方でこのような「交流」は、決して権力関係から自由なわけではない。本書では農業従事経験を持たないにもかかわらず自らを「農婦」として捉えようとする石川と、それに対する他の麗ら舎メンバーの違和感について、サバ

ルタン性をもった「農婦」という「表象＝代表（representation）をめぐる問題」（p.120）として、分析検討が行われている。しかし他の麗ら舎メンバーも、“岩手県北上市周辺から”「『内発』した〈おなご〉たちのフェミニズム」の担い手だと、言い切れるのであろうか。北上市周辺以外に居住したことの無い女性たちにとって、彼女たちが「『内発』した〈おなご〉たちのフェミニズム」の担い手と名乗る、あるいは見なされることに、違和感は生じないのであろうか。

評者自身は、これは社会運動や思想において“地域に根差す”とか“内発”と語ることで自体にひそむ、男性中心主義を乗り越えるという問題に帰着するのではないか、という気がしている。自らの言葉を抑圧され篡奪される女性は男性以上に、進学や就職、婚出によって他の地域に移ることが言葉を探し取り戻す貴重な契機となるのであり、その意味で女性が何かを語り得るとすればそれは本質的に、漂泊者の言葉とならざ

るを得ないのではないか、という気が評者にはするのである。漂泊者が、他所からの篡奪者としてでも流離する貴種としてでもなく、語ることはいかにすれば可能なのか。おそらくそれは、「娘を大学にやっても……金を溝に捨てるようなもんだ、と親にわざわざいってくる人もいる」中で育ち、「一度岩手の『外』に出て」関東地方の大学に進学し、「大学図書館のなかで手に取った一冊のミニコミ誌を通じて」（p.287）ようやく「〈化外〉のフェミニズム」に出会いなおした、という著者自身にとって切実な問題であろうし、世代は違えど似た経験を持つ評者を含む、現在の日本に生きる多くのフェミニストが抱え込まざるを得ない問いではないだろうか。（柳原 恵著『〈化外〉のフェミニズム——岩手・麗ら舎読書会の〈おなご〉たち』ドメス出版、2018年3月、314頁、定価3,600円＋税）
（かいづま・けいこ 岩手大学人文社会科学部准教授）